十七歳の不在

第四章

八月二十日

「山田選子」

「はい」

「天野レイは、家庭の事情のため、欠席」

「和歌山広美は、体調不良のため、欠席」

「それから、今日も欠席の中澤登だが、お父様のお仕事のご都合で、転校することになった」

大久保の声が、空席の多い教室に響く。

「今日は、出席だけ確認して、特に皆の方から報告等がなければ、解散」

「山田」

「川居くん、何？」

　帰ろうとしていた選子に、川居が声をかける。

「天野と和歌山の休みって、山田は何か聞いてた？」

「うん。二人とも大したことないみたいだよ」

「今日、すげえ、天気悪くなるらしいから、早く帰った方がいいよ」

「ありがとう」

「じゃあ、また二学期」

「うん、二学期にね」

　午前十一時。今日の予想最高気温も四十度を超えており、選子は借りてきた祖父の日傘を開く。金魚と出目金が泳ぐ折り紙風の柄で、手作り出来そうな見た目とは裏腹に、雨風には強く、立川駅から高校までを往復する分には、用が足りた。

　今日、選子がいつもとは僅かに異なる西国立駅寄りのルートで帰ることにしたのは、西国立に住む祖父を訪ね、借りた日傘を返却した方がよいか確認することを、帰りがけに思い立ったからだったからだ。居なければ、まわれ右ですぐに帰るだけだ。

その道の途中で、選子は、同じ制服の女子三人の姿を見かけるが、蝉がやかましく、三人の話し声は聞こえなかった。三人ともバス停に並んだが、選子はそのまま歩き続けた。

　もうすぐ、祖父の住むアパートが見えてくるという所で、選子は女性に声をかけられた。

「山田選子さん」

　相手の顔をよく見ると、それは選子も見覚えのある顔だった。

「アカネちゃん、だよね」

佐倉朱音は、小学校で選子がとても親しくしていた友人だった。都立望月高校にも一年生までは同級生として通っていた。退学ではなく休学という扱いだったが、朱音が通学しなくなってからは、それとなく疎遠になっていた。

今日の朱音は、チェーン店ではない、地元のスーパーの制服を着ている。

「結局、私もお母さんと同じ心臓系の病気でね。普通課程だと体力的に大変でね。通信制とか夜学のある高校への転校を考えているけれども。妹と母親と三人での生活でね」

「アカネちゃん、本当にスゴいよ」

「気がついたら、もうやるしかねえって、なってただけ」

　そう言って、朱音は大きな声で笑った。

「本当に、頑張ってね」

朱音と別れた後も、選子はスーパーの制服を着た朱音の笑顔が忘れられなかった。

スゴいとか頑張れとか、こんなときに私はそんなことしか言えなかった。その思いが、選子の胸をぐるぐると支配する。

祖父の住むアパートに向かっていたはずの選子だったが、アパートのある通り道を、アパートにも寄らずに、そのまま直進してしまう。

　さらに、自宅へ向かう道とは別の道へ、選子は進む。

ポタッという感覚とともに音までも額に直接感じた選子は、薄暗い空に拳を突き上げると、手の甲が雨の雫で濡れた。今日、天気が悪くなるって誰から教わった？レイちゃん？広美ちゃん？いや、学校で川居くんからだ。雨を察知するぐらいのことは、私もできたけど。

雨脚が強まり、夕立のようなひと降りを、選子は想起する。

手に携えている日傘を、選子は思わず胸に抱える。それから、カバンの中から、普段から持ち歩いている折りたたみ傘を取り出す。同様に、カバンの中から、天候不良時用のやや大きめなタオルを取り出す。

屋根のある所まで移動すると、日傘やカバンはまだ濡れずに済んでいた。

しかし、カバンや雑誌で頭上を守りながら、小走りで急ぐ人もいる。

夕立は軒先で少しの間待てば、通り過ぎて行くものだった。

ゲリラ豪雨は雨女や雨男の人たちの多く居る所について行くと教えてくれたのは、レイちゃん？広美ちゃん？あるいは、川居だっただろうか。

雨が止み、空気に微かに湿り気が混じる。

再び、大通りまで出たところで、選子は、今度は男性に声をかけられた。

「山田？」

「え、川居くん？」

　川居は自転車にまたがっていた。

　制服のまま、上着を自転車の前のかごに入れている。

「どこに行くの？」

「矢川」

「矢川ってどっちの方面だっけ？」

　駅前で言われ、選子は咄嗟に理解できなかった。

「南武線で一駅。遠くはない。オレ、南武線のヘビーユーザーだから」

「それなら、私は多摩モノレールのヘビーユーザーかな」

「小さい頃、習い事で知り合った友達が居るんだ」

「塾とか習い事に行ってる子って、離れた地域に年齢差もバラバラな友達が急にできたりするよね」

「なんで、いつもは来ない、こんな通りに居るんだ？」

　偶然に遭遇したクラスメイトと、少しでも長く話したい。のではなく、どうしたんだ？とクラスメイトを気にかける、川居はそういう人間なのだと、選子は理解する。

「いつもとは違う帰り道と、そこから更に迷ってしまって」

「複合的な理由があったんだ？」

「私の家、この大通りを渡って、反対側だからさ」

「なんで、反対側にいるか、聞いてよければ聞くけど」

　誰でもよかったんだけどと言うのはかなり失礼だが、ついさっき佐倉朱音に会ったときのこと、大したことは何も言えず、何か力になれることはないかと考えていることを、選子は川居に言いかけて、断念する。何かの気を発して、断念した。

「今夜のところは、そっとしておいてやってください」

川居は、短時間ながらの逡巡を選子の様子に見てとった。

「じゃあ、信号渡って戻るところまで、見届ける」

「それより、川居くん。つい最近、すごく話題になった、お侍さんが主人公の映画、もう観た？」

「観たよ」

「じゃあ、また今度、その話を聞かせてよ」

「おう。じゃ二学期」

「おやすみなさい。二学期ね」

　選子は、ポケットからスマホを取り出す。

　私も、お助けコールに頼っていいかな。

自転車に乗った警官二人が、選子を後ろから追い抜いていく。

その警官らを、赤トンボが追いかけていく。

　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　(完)

<参考図書>

〇「スウェーデンの小学校社会科の教科書を読む」(新評論) (著 ヨーラン・スバネリッド 訳 鈴木賢志)

〇「公職選挙関係小六法」(東京法令出版) (選挙犯罪研究会 編集)